ルイとこーふくな日常
CV：藤村 咲樹
イラスト：鮭乃蔵 不傳
本文＆構成：月見
製作：ひなた古書堂

【ルイとこーふくな日常】体験版

「どうやら、世の中、イイこともあるらしいぜ？」

こんな主人公の決め台詞でこの映画は終わりを迎える。

国外の大手会社が制作した、おっさん刑事《デカ》が事件に巻き込まれ、大ピンチになった末にハッピーエンドまで持ち込む典型的な娯楽映画である。

この手の映画に好みの差はあっても、万人が楽しめるという意味ではいい映画であると思う。

久しぶりに何も考えずに映画を楽しんだ私の金曜日の夜は更ける。

映画鑑賞後つけていたテレビにはの深夜のニュースが流れていた。公共施設に侵入する窃盗犯の話題で持ちきりであったが、映画の余韻が途切れると思い、テレビを消し、眠りにつくことにした。

私こと、【多岐川るい】は、考えもしなかった。
自分の『幸が薄い』という神様の贈り物のような体質のことを。
そしてその幸が薄い私が映画の主人公のようにピンチに巻き込まれるという可能性を。

この映画が次の日のイベントの引き金になったのは変わりようのない事実だった。

土曜日

授業も半日で終わり、私は友人の美空と一緒に学校の敷地内にある離れの倉庫へとやってきた。

担当の教師から奉仕活動という名目で、離れの倉庫の掃除と寄贈された絵画が倉庫に紛れこんでいないか調べる仕事を仰せつかったのだ。

「貧乏くじ引いちゃったね。ちゃっちゃか、済ませて帰ろ、美空？」

コクンコクンと大きくうなづく整った顔立ちの女の子。

彼女の名前は、【美空・キュリアスリー】

よく一緒に学内の活動に参加するため、美空とは最近仲良くなったのだが、この子はあまり喋らずに事を済まそうとする傾向がある。反面、妙な方向に行動力があり、決して大人しいという事はなかった。

そして、米国系ハーフである彼女の髪は金髪に近い。その髪が風に揺れる。

「うわぁ～、相変わらず綺麗な髪だねぇ。ちょっと羨ましいな～」

ニッコリと微笑む美空には、とても好感を覚える。

倉庫に来る途中も美空は色々な人から声を掛けられ、それに手を振って答えていた。中には、『また後でねーっ！』とハイタッチまで仕掛けてくる元気な子もいた。うちの学校の体操服を着てたあの子は、確か美空と腐れ縁の友人だったかな…。何回か私も喋った記憶があった。

そんな感じで美空は無口ではあるが、愛想もあれば友達もいる、そんな女の子だった。

さて、美空を引き連れて離れの倉庫に到着した。

だだっ広《ぴろ》いグランドと学校所有の裏山の境にあるこの倉庫は、三階建てでとにかくイベントの多いこの学校のなんでも物置となってい

る。
運動部すらも滅多に近づかないので、たまに私達のように整理に回される人間以外はほとんど使われない。
「じゃあ、サクサクやろうか？」
私達は鍵を開けて倉庫の中へと入った。
『掃除の報告と鍵の返却は週明けで』との先生のお言葉だったので、私は掃除を早めに終わらせ、遊びに出る気満々だった。
「なんだ、使われてない割には案外綺麗じゃない？」
前の使用者からあまり使われてないためか、倉庫内は比較的整理されており、仰せつかった三階の荷物整理と軽い掃除は一時間を経たずに終了となった。寄贈された絵画は結局見つからなかった。

「うん、意外と早く終わったね。ちょっと休んだら帰ろうか……って何してんの、美空？」

振り向くとゴソゴソと美空がダンボールを箱を漁っていた。

確かのその箱には、学校指定の服飾関係の物が入ってた筈なんだけど。

ピタッと美空の動きが一瞬止まった。何かを見つけたようだ。

そしておもむろに私に近づいてきて、嬉しそうに見つけた物を渡してきた。なにやら緑色の服のような物だった。

「なになになに？　…これって、うちの学校の昔の体操服…、ブルマじゃない？」

体操服が切り替わる際の余りが倉庫に眠っていたようだ。

ビニール袋にしっかりとくるまれたため埃などはついておらず『新品消毒済』と書かれたタグがついていた。すぐにでも履いても問題ない仕様となっていた。

「ブルマねぇ…、私のトコロは小学校からブルマじゃなかったから、特に懐かしさも感じないんだけど……ぉぉお？　み、美空さん？　そんな何を、そんなためらいもなく着替えようとしているのぉ？」

美空を見るとすでにブルマに着替えが終了している。どうも美空は、初めて見たブルマに興味を持ったようだ。これなのだ。これも美空の妙な行動力を示す一つの例だった。

「私にも渡したって事は、着替えろって事なのよね……しゃーない、付き合うかぁ…」

半ば諦めたように私もブルマに着替え始めた。
ここが人が滅多に来ない倉庫でよかったと思う。女子高校生が二人して倉庫でブルマに着替えているシーンは、なかなかにシュールだと思う。
そんな事を考えながら、私もブルマを履き終えた。
なるほど…色々出ないように気をつけたりしないといけないとか色々あるけど…

「なんだコレ？　結構恥ずかしいぞっ！？」

私の人生初のブルマのコメントは美空的にも満足だったようで、おそろいの服装でウキウキと言う事で、美空からは軽い抱擁《ハグ》がプレゼントされた。
むぎゅ～っと擬音が聞こえそうな心地いいハグ。
美空は可愛いし、ハグも嫌いじゃないけど、こっちは色々と精神的に置いてけぼりである。

でもそんな事をしながらも、掃除は終わった訳で、私達は小綺麗になった倉庫で休憩する事にした。折角なのでブルマはそのまま。

（動きやすいトコロが利点だな、この服は）

そんな感想も抱いた。

買っておいたジュースを飲みながら、美空とお喋り。彼女は無口ではあるが、決して喋らない訳ではないのだ。

そして会話は昨日観た映画の話になった。

「あれね、私は意外と好きだったよ。爆破脱出シーンとか結構ハラハラしたし、女優さんも可愛かったし」

そこで美空が大きくリアクションを取り始めた。どうやら、何か思う

トコロがあるらしい。私が詳しい真相を問いただしてみると、どうもこのような事だった。

「え…っと、脱出シーンが微妙だった？」

美空が言うには、あの爆破脱出シーンは今ひとつ納得がいかないらしい。

元々、口が達者ではない子だけに、言葉でこの納得のいかない部分を説明するのが難しいようだ。

「ふーん…、じゃあそのシーンを演技とか寸劇《すんげき》で再現してみたら？　そうしたら何が不満なのか分かるんじゃない？」

おぉっ！　と羨望《せんぼう》の眼差《まなざ》しの美空は、思い立ったようにまたダンボールをゴソゴソと探り始めた。恐らく、再現に必

要な小細工を探しているのだろう。

今日は暇だし、美空の気が済むようにしてあげようかと私は気楽に構えていた。

この仏心《ほとけこころ》がいけなかったんだ、これが…

―――――――――――――――――――――――――――――

「わー、ロープだー」

棒読みな私の言葉を尻目に美空がキラキラな瞳で持ってきたのは、荷造り用のビニールロープの塊だった。

そういえば、思い出した。

あの映画、脱出シーンって確か『乱立する廃ビル郡』と『大型客船』から二箇所同時大爆発からの生還シーンが凄かった事を。

さらにそのビルと船にはそれぞれ、物語のキャスト達が厳重拘束されるという徹底的なピンチシーンという過剰演出が施《ほどこ》されていた。

「…ん？　なになに？　あの脱出シーンで主役とヒロインの拘束が絶対に解けないくらい強固だったのに無事に脱出、出来たのがおかしいって？」

美空の言い分は…わからなくもない。

詳細は抜きにしても、拘束からの解放のくだりは、少々強引だった感はある。もちろんエンターテイメントとしては、それで充分なモノと私は思っているのだが。

「要するにあの映画の拘束は、短時間じゃ絶対に解けないって事を証明

したい訳ね。……別にいいわよ、美空に付き合ってあげる。ただね…」

含みを持たせた言い方に美空は、首をかしげていた。

私は少しだけ自信を含ませた表情で次の言葉を放った。

「私、縛られ慣れてるから、縄抜けとか得意だよ？」

それを聞いた美空の瞳は、好奇心からか、またキラキラと輝き出した。

誤解がないように言っておくと、私にそんな趣味は無い。

『部活の助っ人《すけっと》』という名目で運動・文化部を問わずに色々な部活をフラフラしている私は、演劇部やマジック同好会などにも参加している。

演劇部では、誘拐された町民の役やヒロインを演じ、マジック同好会などでは、エスケープ・アーティストとして縄抜けなどのマジックも手

伝っている。
そういった意味では、普通の人よりかは、拘束される機会が多く、また縄抜けが得意と言う自信もここから来ているのである。
「それじゃあ、まぁ、サクサクいきますか」
私は掃除をする時と同じようなノリで、軽く身体をほぐし始めた。
美空はコクコクと嬉しそうに頷《うなず》き、私のストレッチが終わるのを待ちわびているようだった。

ひなた古書堂

私の後ろに回った美空は、まず私の手を後ろに回し手首同士がくっつくように合わせて縛り始めた。

「み、美空さん？　な、なんでそんなに手馴れてるのかなぁ～…」

想像していたよりもずっとキビキビと動いているように思う。

本人からは、『ちょっとだけ練習してたから…』との小さな声でコメントがあった。

手首が拘束が終わった段階で軽く力を入れてみた。

（うわっ…ナニコレ？　全然外れないわ…。なにがちょっとよ、しっかり練習してるじゃない…）

予想よりもしっかりとした拘束方法に焦りを感じていたが、美空に至

っては鼻歌交じりに楽しそうな様子。
そして拘束は徐々に深くなっていった。
肘同士を合わせるように、さらに二の腕同士も限界まで近づけてロープで拘束される。腕を背中で一本棒のように括《くく》られたイメージだ。

「んんっ！ダメっ外れない…って、美空～、コレ凄い窮屈《きゅうくつ》だよ～」

後ろ手で一本にされた腕をブラブラさせながら言った私の抗議もモノともせず、美空は私の胸の上下にもロープを巻きつけてきた。何事も本格仕様がモットーの演劇部でも何回か縛られた経験はあるが、この拘束方法はお初である。

（うむぅぅ～、…でもこれ、縛りすぎじゃない？）

無意識の内に私は軽く力を入れて、身体を揺さぶっていた。一見無造作に見えるロープだったが、それはしっかりと私の身体に巻きつき離れなかった。

『もぅ動いちゃ駄目だよ？』　と、美空に軽く怒られながら、私は側にあった体育用のマットの上に座らされた。

そこでは、汚れるからという理由で丁寧に靴を脱がせてもらった。

「あ、あぁ、ありがとね」

ニッコリと微笑みで返す美空は可愛い。

確かに可愛い。……手にロープとか持ってなければ。

なんか怖い。えっと…確かヤンデレって言うんだったかな、こういうの。

「やっぱ、足も縛るの？」

美空は私の両足を揃え、足首にロープを巻きつけ始めた。

作業途中、『ルイのソックスは、四葉のワンポイントが入ってて可愛いね』と美空の言葉。

「ありがと。ホラ、私って自他共に認める幸の薄さでしょ？　四葉は幸運の印、私のゲン担ぎみたいなものなの。でも美空のアーガイル柄のニーソも似合ってるよ、すっごく可愛い」

『ありがとう』とまたニコニコになる美空。しかし作業の手は緩む事なく、サクサクと進められた。

足首が終わり、今度は膝の拘束が開始され、私は映画のワンシーンを思い出していた。美空がここまでこだわるのであれば、映画と同じよう

な拘束方法になるはずと考え、最終的に私がどうなるかを予想してみた。

確かアレは……あ、凄く嫌な予感！？

「美空？　まさか映画とおんなじ縛り方する気じゃないわよね？」

キョトンとする美空。

そして『うん、当然だよ』の一言。

「あちゃ～……、やっぱり……？」

私はそっと覚悟を決めると、美空にうつ伏せに転がされ、そしてそのまま膝を限界まで曲げ、手首の縄目と足首の縄目をロープで繋がれた。

「……んっ、うっ、……っつ……キッツいな～、コレ……」

ギリギリとロープが擦れる音がやけに大きく聞こえる。手と足が繋がってるせいで膝を曲げると手首部分が突き出したお尻に触れてしまう。

（にゃ～…、これは…ちょっと恥ずかしいな～…）

おしり・・・マズイ・・・
もどかしいよぉ・・・・
うわぁ
ひなた古書堂

私の中の当初の予定では、この時点で縄抜けを完了させて、美空を驚かすつもりでいたのだ。しかし後ろ手に回され、ピッタリと合わさった手首や腕は、離れる事はなかった。

次に私は、手首と足首を繋ぐロープが解けるかを試してみた。繋がるロープに手をかけ、徐々に足首へ。なんとか結び目らしきトコロを発見したが…

（…こ、この体勢…つらぁ…）

身体を思い切り反るこの体勢は、短い間しか出来ず、あっさりと力が抜けてしまう。反った背筋の反動からか、自然と楽な方向へ突き出した膝。

そのため私の手とお尻は、否応≪いやおう≫なく、接触する。

（…むぅぅ…まただぁ…もぅ…）

その後も何度もロープを解こうと試みたが、固い結び目と反った体勢のため、無駄に終わった。そのたびに手とお尻が合わさり、なんとも言えない気恥ずかしさが私を襲う。

（…私だけなのかな……手とお尻が…触れて、恥ずかしい…とか）

着慣れないモノを着ているせいかも知れない。いつもの体操服よりもサラサラしている感覚は、嫌いではなかった。いつもと違う服装、非日常な状況。それらが普段の感覚とは違うモノを呼び起こしているのかも知れない。

私は、一回だけ、わざと膝を前に出してみる。足首のロープのキュッと張る音と共に手首が引っ張られる。引かれた手首は、ちょうどお尻で止まり、もぞもぞと、手や指を動かした。

（…慣れてはきたけど…やっぱり、恥ずかしい…かな……手とお尻）

その感覚は、しばらく消える事はなかった。

後に演劇部の部長に話を聞いたら、これはホッグタイという名前の拘束方法らしい。国外で軍隊や警察機構が犯罪者を徹底拘束する際にもよく使われてるらしい。

「全然、身動きが取れないよ…」

そうだ、そうだ、そうだった。確かに映画のヒロインがこんな縛り方で転がされてたっけ…。なるほどね、これは脱出とか短時間では無理だ。

それを見て美空は『もう少ししたら、ちょっとしたイベントもあるから、それまで我慢してね？』と言ってきた。

「うえぇ…。このままでぇ？」

私の泣き言を聞いてさらに美空は、気が紛れるからと例の映画のワンシーンを演じる、映画ごっこをしようと持ちかけてきた。

正直、このままでは辛すぎるので、その提案に乗ることにした。少しは気が紛れればいいかとそのくらいの気持ちだった。

あのヒロインかぁ……、結構役柄的に荒っぽい印象だったなぁ。

体験版は、ここまでとなります。

この度は体験版のダウンロード　ありがとうございました。

製作・著作　ひなた古書堂　　月見